

第53回全日本中学校国語教育研究協議会

子どもたちが自ら学び、深める授業づくりの実践と改善

丸亀市立本島中学校 山田 麻未

1 全体会

① 概要

○基調提案

・研究主題

「言葉の力を学び、次代をひらく～子どもたちが自ら学び、深める授業づくりの実践と報告～」

・これまでの神奈川県での取り組み

プロセスを重視し授業の単元化を図るために「学びのプラン」を活用することで、生徒による主体的な学習の促進を目指す。

・本大会の主題の意味

生徒が主語となり、主体的に学習を調整できる授業づくりを目指す。

・「学びのプラン」とは

学習の進め方や評価の内容を生徒と教師で共有し、生徒自身が用いる単元の授業計画のこと。

生徒自身が「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」を記載する。

・今後に向けて

①「学びのプラン」の活用

②「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたプロセス

③系統性を意識した授業づくりの確認・再提案を協議する。

○文部科学省による講和

テーマ：今年度の全国学力・学習状況調査の結果からわかる、国語科の成果と課題について。

【成果】

生徒は言語活動に一定程度取り組んでいる。

【課題】

目標の重点項目の内容に着目し、資身に着けるべき資質・能力の実現状況を把握し、学習改善を促すことが十分にできていない可能性がある。

【改善のために】

・指導事項の重点を置くべき指導内容の明確化を行うこと。

・指導項目の重点内容に着目し、「学習改善を促す指導の工夫を行うこと。」

② 考察

神奈川県での取り組みの大きな柱として、「学びのプラン」と「オール神奈川によるユニット制」の二つが行われ、教育活動の充実を図っている。

「学びのプラン」については、概要でも少し触れているが、単元の目標や言語活動の記載をはじめとし、生徒自身が学習の見通しを立てられるものとなっている。一つの単元を一枚のワークシートにし、常に手元で確認できるようにしておくことで、自身の学びをいつでも振り返ることができる。また、生徒自身が授業を通して身に着ける資質・能力の内容を理解し授業に臨むことで、常に必要感を感じながら取り組むことができると考える。

基調提案の資料に「生徒に寄り添い、伴走する視点に立ち、生徒一人一人の個性に合わせて資質・能力の育成を図る」とある。「学びのプラン」がしっかりと機能すれば、生徒一人一人が自身の学びに向き合い、振り返りを行うことによって、自分の学びを強く自覚することができるよ

うになると考える。

また、「ユニット」という市町村の枠を超えた分科会が構成されていることも、神奈川県为国語科教育の大きな特徴の一つであると考え。「ユニット」とは、県内全域から募ったユニットメンバーを中心に、授業実践や課題等の共有、そこから得たものの還元、学習会の開催などを行っているものである。「ユニット」の存在によって、県全体で研究や実践などが積極的に行われ、教師の資質・能力の向上をはじめ、ネットワークの広がりを生んでいる。学校単位や地域単位といった限定的なものではなく、県全体で一つのものに向かうことによって、個人だけでなく集団のレベルアップにつながると感じる。

生徒に対する「学びのプラン」の活用と、教師自身の資質・能力を向上させる「ユニット制」で神奈川県为国語教育の研究と充実が行われていることが、主体的に学習に臨む生徒の姿を生んでいるのだろう。

2 授業

① 概要

○授業〔読むこと（文学）〕

本単元は、学習指導要領「C読むこと（1）ウ」「C読むこと（1）エ」に重点を置き、芥川龍之介作『トロッコ』の精査・解釈を通して、読書の面白さを再発見することを目標としている。

本授業においては、教師が定めた『トロッコ』の内容に関する3つの疑問について、それぞれのグループで検討し準備した答えをもとに討議することで、新たな視点の獲得を目指している。

○授業討議

討議テーマ：「読書の面白さを感じたり、読み方を広げたりするための工夫」

PMIシートを活用しての討議を行った。討議の初めに、数人の生徒にインタビューができる時間をとっており、学習を通して得た力を、どのように実感しているのか、学習者の視点で聞くことができた。

また、「学びのプラン」を活用した取り組みや成果に対する補足説明や質疑応答が見られ、独自の取り組みである「学びのプラン」への関心が高いことがうかがえた。

② 考察

今回の授業の言語活動は、お互いに聞き合い、伝え合うことが主であった。その中で、どの学習者も自身の意見に自信をもって答えていたように思う。

その大きな理由として、一人一人の読みがかなり深まっていることが挙げられる。自身の意見に対して、正しい根拠を持ち、それを言語化することができていた。発表の仕方の一貫性や、自身のグループの発表を積極的に助けようとする姿勢など、日々の学習の中で根付いているものを、存分に発揮して授業が行われていた。普段の学習の中で、根拠を示すこと、その根拠が自身の考えにどうつながるのかを考える活動が日常的なものになっていると感じた。

先述した3つの問いを、

- ・「二人の若い土工は悪い大人か」
- ・「最後に大人になった良平を描いたのはなぜか」
- ・「色や風景が描かれる効果は何か」

とし、それぞれの問いに対して各グループで複数の答えを準備している。そこからなぜそう考えたのか、根拠となる部分はどこなのか、それぞれの意見と比較して生まれた自身の考えも交えながら発表する学習者が多く見られた。柔軟な発想で、尚且つ物語の内容から出ない意見を持った学習者同士のやりとりが行われていた。教師主導ではなく、基本的には学習者同士のやりとりのみで授業が進んでお

り、教師が何も言わなくても授業が展開していく様子が見られた。これに関しても生徒の『トロッコ』の内容の理解の深さと、「もっと知りたい」という姿勢の表れが感じられる。

また、「学びのプラン」を活用し、身に着けるべき資質・能力、言語活動、授業の流れなど、学習者自身が見通しをもって取り組める授業となっていた。振り返りの記入でも、単元の初めに書いた内容を確認しながら、単元最後の振り返りを書いている姿が多く見られ、自然と以前の自分と比較しながら振り返ることができていた。「学びのプラン」があることによって、振り返る観点が明確になり、振り返りがしやすくなるを考える。

なぜ話し合いをするのか、なぜこの3つの問いについて考えるのかが明確で、目的意識をもった学習者主体の授業が行われ、どんどん考えが深まっていく様子がよくわかる時間であった。

3 分科会

① 概要

○実践報告〔読むこと（文学）〕

【神奈川県横須賀市】

教科書の文学的な文章を通して自分のく<読み>を創造する生徒の育成
～一人ひとりの豊かな文学体験につながる指導を目指して～

【埼玉県北本市】

課題解決方法の「発見」と「活用」で「学ぶ楽しさ」を作る。

○討議

【神奈川県横須賀市】

討議テーマ：文学的文章において「生徒を主語」とするための教師の立ち位置と役割とは

【埼玉県北本市】

討議テーマ：生徒が身に着けた力を別の単元でも活用できるようにするための授業構想とは

② 考察

二つの実践に共通するものとして、学習したものを別の場面で生かすということが挙げられる。横須賀市の実践では、文学的な文章の授業で身に着けた「読み方」を用いて、小学校の教科書に記載されている文学的文章の読み方や魅力を、新一年生にプレゼンするというものであった。実際に自分が学んだことを伝えなければならないという必要感と、よりよいプレゼンをしたいという思いが見えた実践であった。

人に教えるためには深い知識が必要であるため、何のために学習を行うのか目的意識を常に持ちながら学習に取り組むことができるように思う。また、年間を通しての実践となっており、自身が確実に培ってきた力を実感し、それを生かすことができる場が確保されていることで、より高い積極性をもって授業に臨むことができるのではないだろうか。

埼玉県の実践でも、自身が得た資質・能力を生かし課題解決に向けた取り組みが行われていた。批評文を書き、周りとの交流することを通して、自身の考えの深まりから課題解決に向かう姿勢と力を育成しようとしたものである。本単元では、スモールステップを用い、批評文を書く際に着目すべき観点や書き方などを学んだうえで、課題を解決していくための方法を確立させることを目指している。スモールステップを踏むことによって、文章を書くことに対し、苦手意識がある生徒も取り組むハードルを下げるができるのではないかと考える。

しかし、この実践には課題が多く残ったようである。ステップの一つである平易な文で批評した際に得た視点や書き方を、魯迅『故郷』で生かされなかったという。批判的な観点をもって読むこと

はできていたが、作品の価値に結びつかなかったり、自分自身の意見が作品の良しあしをどう決定づけるのかまで迫れなかったりしたようだ。スモールステップは学習において、有効な手立てであると思う。しかし、単元全体に系統性を持たせることが必要不可欠であると考えている。今回の実践であれば、平易な文と『故郷』は同じような観点で読んでいくことができるのかをしっかりと検討したうえで、取り組ませる必要があるのではないだろうか。

生徒が身に着けるべき資質・能力を養っていくためには、適切な教材選択と適切な指導が必要である。この二つの実践は、自身の学びを生かせる喜びと、それが社会生活で生きる力であるという実感を得られるものであったと感じる。

4 今後に向けて(R9 四国大会)

神奈川県を取り組みは、生徒の主体性と学習の見通し、自身の学びの自覚が重視されているものであると感じる。神奈川県全体で行われている「学びのプラン」を活用したこの取り組みは、生徒の個別最適な学びを保障しているように思う。

10月に行われた、「令和6年度全国学力・学習状況調査を踏まえた学習指導の改善・充実に向けた協議会」では、〔A 話すこと・聞くこと〕〔B 読むこと〕〔C 書くこと〕〔知識及び技能〕のそれぞれで香川県の課題が明らかとなった。そこで示された課題解決に向かう単元づくりのポイントとして、

- ・生徒自身が言語活動と身に着けるべき資質・能力を理解し、見通しを立て学習できるようにする。
- ・自身の学習状況を把握し、自らの学習を調整することができるようにする。
- ・自身の学びを振り返り、分かったことや

気づいたことなどを整理して、今後展開できるようにする。

の3点が挙げられた。これらの項目はすべて、この神奈川大会で行われた実践や「学びのプラン」を活用し、取り組まれていたことであると考えている。「学びのプラン」を活用し、言語活動や身に着けるべき資質・能力を生徒自身が理解し、見通しをもって授業に臨んでいる。また、学習したことを別の場面で生かされるように言語活動を設定することで、自身の気づきや知識をより深める活動を行っていた。今回の神奈川大会では、香川県が抱える国語科の課題解決に向けて、非常に参考になる取り組みが多く行われていたように思う。香川県の課題と解決に向かうためのポイントや実践例を共通認識とし、そこから実践に向かうことで、より深い学びができる生徒の育成につながるのではないだろうか。まずは自分の目の前の生徒の実態に即した実践を行い、予測不能な社会をよりよく生きていくための国語教室を目指したい。

今回は、このような貴重な経験をさせていただきありがとうございました。厚くお礼申し上げます。